徳島県立博物館研究報告
Bull. Tokushima Pref. Mus.
No. 33: 51–61, 2023

【調査報告】

八貫渡銅鐸考

菅原康夫[1]

[Yasuo Sugahara : Study on Hachikanwatashi Dotaku（Bronze bell-shaped vessel）]

摘要：阿南市下大野町渡りから出土した八貫渡銅鐸は鈕のみが遺存している．従来双頭渦文飾耳にブリッジをもつ型式と見られてきたが，その評価については等閑に付されてきた感がある．本稿では八貫渡銅鐸の型式的位置を明確にすると共に，帰属する銅鐸群の新旧関係や本鐸をめぐる問題について検討する．
キーワード：突線鈕式銅鐸，ブリッジをもつ双頭渦紋飾耳，阿波南部銅鐸群，阿南市，那賀川

八貫渡銅鐸は阿南市下大野町渡り上り出土の銅鐸である．鈕のみの遺存であるが，1870 年以前に那賀川の洪水による破堤があり，その修繕の際，川底より採取されたものとされる（玉置，1902a）．梅原末治の『銅鐸の研究』には形状図と計測値・拓影が挙げられており，一部に銹があるが全体に磨滅し，一部分に水蝕の痕があるとしている．出土については那賀川氾濫年時の 1885 ～ 1886 年頃とし，川岸に近い場所とする（梅原，1927）．

出土地は那賀川が山間部から平野に流出する地点の右岸築堤部周辺と考えられるが，現状では周辺に弥生集落等は確認されていない．出土・埋納状態をうかがう手立てはないが，本鐸は梅原が推定全高 100㎝とした大形銅鐸である．

従来双頭渦紋飾耳にブリッジをもつ突線鈕 4 式鐸と見られているが（進藤，2007），阿波地域における最大の一鐸であるにもかかわらず，その評価についてはほとんど言及されたことがない．そこで本稿では銅鐸の位置づけと本鐸をめぐる問題について述べることにしたい．

一　八貫渡鐸の形状と系列

本銅鐸は出土後，幾度か所有者が変更しており，現在は徳島県立博物館蔵品となっている．『銅鐸の研究』図録に掲載された拓影の上段を A 面・下段を B 面とする（図 1，図 2，図 3）．

鈕は頂部と左右の飾耳を欠損するが，外周部は破断面を含めて磨滅している．鈕脚壁付根の舞の破断面も磨滅により角が取れて光沢がある．A 面の外縁第一文様帯付根上位には一部表面の剥離が見られるが，その部分にも磨滅があり，鋸歯文や半円重弧文にも光沢を認めることから，出土後，意図的に磨かれた可能性がある．

全体に銹・土・砂粒等の付着物は少ないが，A・B 面の菱環文様帯付根から鈕脚壁基部には土が固着しており，この部分には磨滅は及んでいない．鈕脚壁の破断面も磨滅はないが，玉置報文の形状図には鈕脚壁の欠損は示されておらず，あるいはその後に生じた毀損であるかもしれない．A 面の菱環文様付根にも磨滅のない破断面が一部分残っており，これも後からの毀損と考えられる．

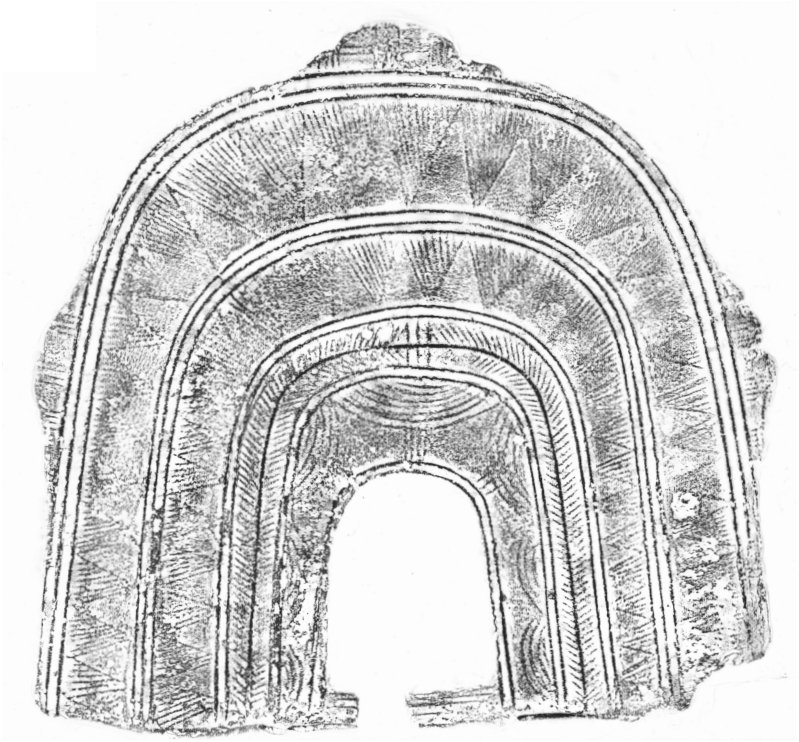
鈕は残存高 28. 3cm 最大幅 29. 5cm を測る．A・B 面とも外周突線は 3 条，外縁第一文様帯と第二文様帯の界線は 2 条，菱環文様来の界線は 2 条である．鈕脚壁には 4 条線がある．鈕孔上縁に 1 か所鬆孔をとどめるが，徳島市矢野銅鐸に比べると紐全体に鬆が多い（図 4）．

A 面は外縁第一文様帯 27 ＋ 1/2 単位の R 鋸歯文で埋めるが，右上方 1 単位に 1R 鋸歯文がある．外縁第二文様帯は 26 単位の R 鋸歯文，菱環文様帯は 3 条の中央界線で区画された CⅢD 綾杉文．内縁は上部に 1 単位，左右に各 3 単位の半円重弧文で埋め，重弧文を区画しない 2 乃至 4 条の平行線を 3 か所に配置する．

B 面の外縁第一文様帯は 30 ＋ 1/2 単位の R 鋸歯文であるが，右 1 単位に複合鋸歯文 LR を埋める．外縁第二文様帯は 29 単位の R 鋸歯文．菱環文様帯は 3 条の中央界線で区画した CⅢD 綾杉文．内縁は上部に 1 単位，左右に各 2 単位の半円重弧文を配置する．

2022 年 11 月 30 日受付，12 月 21 日受理．
石井町文化財保護審議会，〒 779-3295　名西郡石井町高川原 121-1. Council for the Protection of Cultural Properties Ishii Town, 121-1,Takagawara,Ishii-chou,Myouzai-gun 779-3295,Japan.

図 1　八貫渡鐸（約 40％に縮小）



A

B

図 2　八貫渡鐸　拓影　（約 40％に縮小）

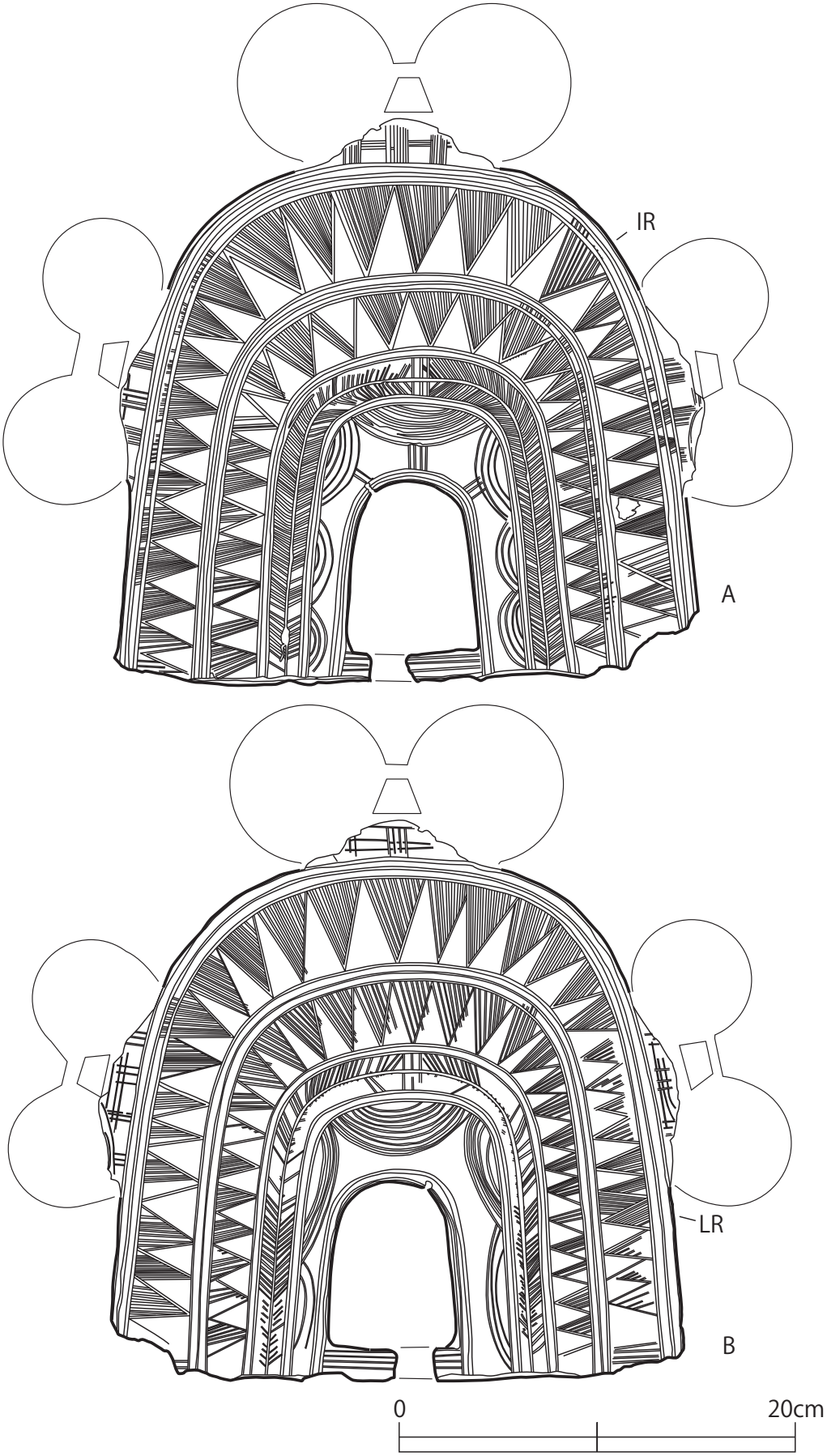


図 3　八貫渡鐸形状図

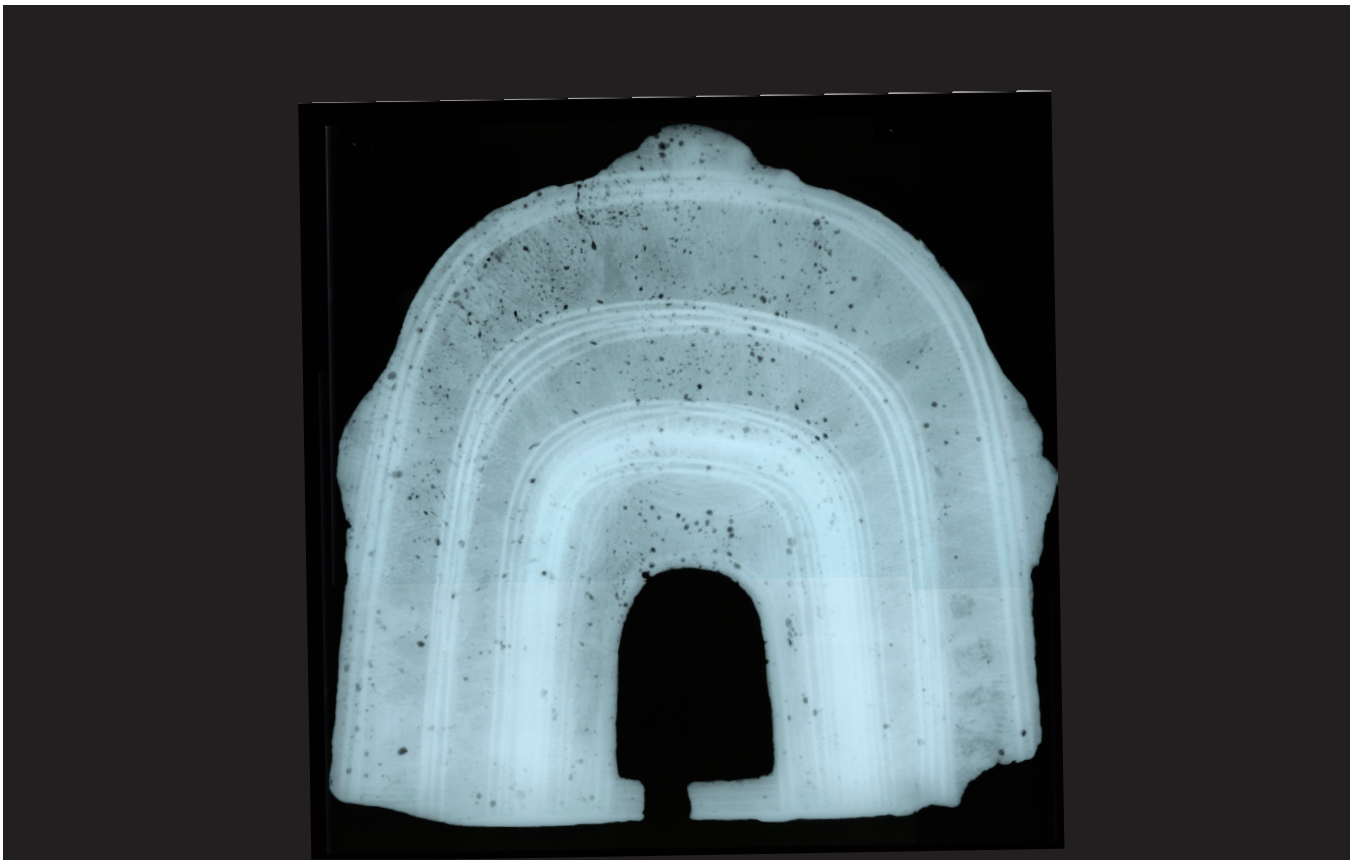


図 4　八貫渡鐸　エックス線写真（約 40％に縮小）

双頭渦紋飾耳基部には網代状の縦横に交差する条線を施すが，A 面の右基部のみ横条線に交差する縦条線がない．

双頭渦紋飾耳間をブリッジでつなぐ突線鈕 4 式鐸には強い斉一性が認められる．双頭渦紋飾耳が大きい．飾耳基部に縦横に交差する条線をもつ．鈕上縁および菱環文様帯が隅丸方形を呈し，内縁上部に 1 単位，左右 2 単位の半円重弧文で飾る．身の縦横帯が互いに交差する C 系列である．全高が 100 ～ 110cm の大形鐸で，鰭下端の飾耳が下辺横帯下の界線の位置にあり，全般に裾が長い．などの構成要素をもつ．この要素をもつ銅鐸は出土地不詳・天理大学附属天理参考館鐸，紀伊・大久保鐸，同・山田代鐸，播磨・下本郷鐸（メトロポリタン美術館蔵）（置田，1990）の四鐸が知られている．

突線鈕 5 式鐸には但馬・久田谷鐸，紀伊・鐘巻鐸，同・朝来鐸（大英博物館蔵）の 3 鐸がある．5 式鐸では鈕形状や内縁の文様に変化が見られるが，本稿ではブリッジを指標にして形態の特徴をよく示す鐸を基に便宜上，山田代型と呼称し，4 式鐸を山田代型Ⅰ類・5 式鐸を山田代型Ⅱ類とする（図 5）．

八貫渡鐸は飾耳基部と鈕内縁の文様から山田代型Ⅰ類鐸と見られるが，同じ施文ながらブリッジのない伊賀・湯舟鐸（4 式 C）が認められるので，八貫渡鐸が山田代型鐸である根拠を示しておこう．

湯舟鐸は飾耳基部と内縁の施文，全高が山田代型Ⅰ類と共通するが，双頭渦紋飾耳がわずかながら小さい．そのため飾耳基部の下縁は，実測図による計測が可能な天理鐸・山田代鐸ではそれぞれ 10. 4cm，10. 6cm を測るのに対して 10cm に満たない．また鈕全体にやや丸みがあり，菱環文様帯界線の隅角が丸い．山田代型Ⅰ類四鐸との比較では，鰭下端の飾耳位置が下辺横帯下の界線より上位にあり，身裾の長さが 20cm 弱と短い，などの点から山田代型とは相違がある．

八貫渡鐸は，双頭渦紋飾耳基部幅が 10. 5cm で山田代型鐸Ⅰ類二鐸とほぼ同値である．鈕形状は後述するように天理参考館鐸と同形である．よって八貫渡鐸は山田代型鐸と考えられ，鈕の規模から全高 110cm 前後の突線鈕 4 式 C 系列鐸になろう．

二　八貫渡鐸に認められる特徴と系列鐸群の前後関係

山田代型Ⅰ類では，本群の特徴の一つである双頭渦紋飾耳基部の飾り方に，縦条線と横条線の交差（八貫渡鐸・天理鐸・大久保鐸 A 面（東京国立博物館，2005 の表記）・下

本郷鐸）と縦あるいは横条線のみ（大久保鐸B面・山田代鐸）のように差異がある一方，鈕は外周突線3条，外縁第一・二文様帯の界線3条，菱環文様帯の界線3条で，内縁に半円重弧文を上部に1単位，左右に2単位配置するように規格性が強い．

八貫渡鐸もそうした規格性をもちながらも，他の鐸には見られない次のような施文上の特徴が見られる．

【特徴一】A・B面で内縁を飾る半円重弧文の配列が異なる．

【特徴二】A面の内縁には半円重弧文を分割する区画線とは異なる2乃至4条の平行線がある．

【特徴三】B面の外縁第一文様帯下端・鈕脚壁の延長部の左右に3・4条の平行線がある．

特徴一は両面の施文の相違である．A面に対しB面は山田代型Ⅰ類の配列を採っており，明らかに飾り方を違えている．両面の施文の違いは大久保鐸の双頭渦紋飾耳基部にも認められるが，これはA面左右の飾耳基部には縦横の交差条線が見られるのに対してB面は横条線がないという誤差程度の相違であり，突線鈕4・5式鐸で八貫渡鐸のような飾り方を示す例は他にはない．

特徴二の内縁の半円重弧文を分割する平行線は，私見では突線鈕1式に位置づけられる阿波・榎鐸を初現とし，紀伊・常楽鐸，土佐・田村正善鐸（2式），山城・式部谷鐸，伊勢・高茶屋二号鐸，遠江・穴ノ谷鐸（3式），紀伊・雨請山鐸，阿波・矢野鐸（5Ⅰ式）に見られるが，八貫渡鐸の平行線は分割の原則とは異なった施文で，これも他に類例がない．

上部1単位，左右各3単位の半円重弧文の配列自体は榎鐸A面（菅原・藤川・植地，2011の表記），式部谷鐸の構成を引き継ぐものであるが，半円重弧文に覆われた上部の平行線は4条で，菱環文様帯中央の3条界線の続きではない．左右の平行線も菱環文様帯に繋がっていない．したがって，この平行線は扁平鈕式銅鐸の横帯分割型A類の出土地不詳・伝播磨鐸やその影響と見られる阿波・勢合鐸（六区袈裟襷文銅鐸正統派1b式）の菱環文様帯から内縁を貫

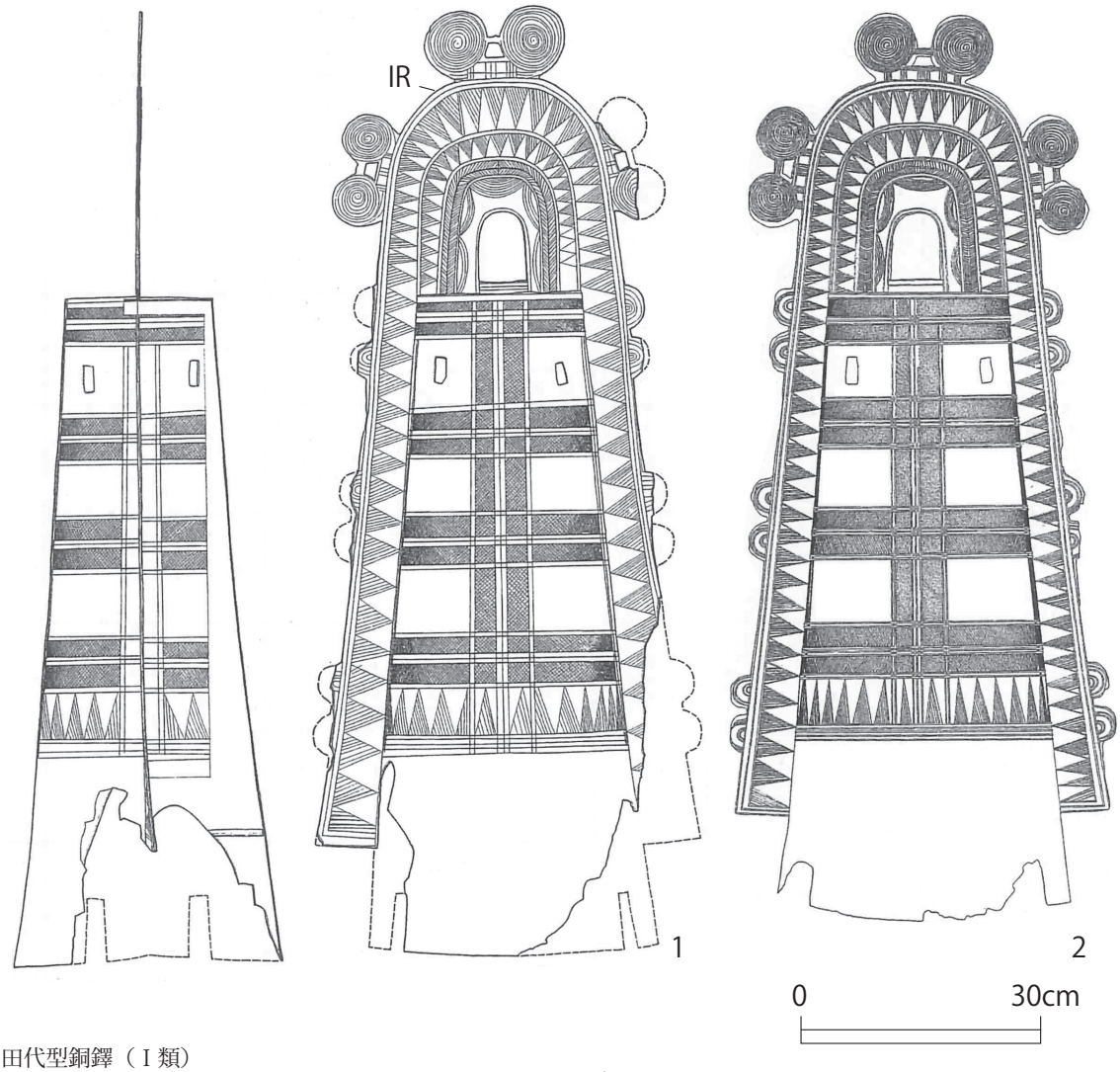


図5　山田代型銅鐸（Ⅰ類）
1 天理参考館鐸B面　2 山田代鐸A面

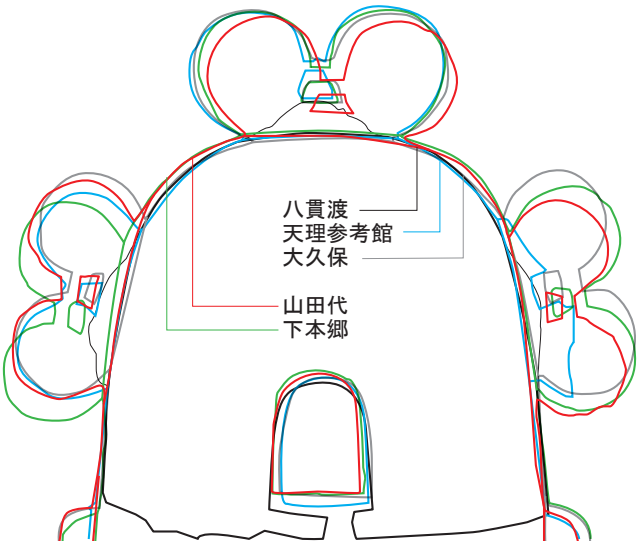


図 6　鈕の形状

く区画界線（菅原，2019）の型式学的痕跡と見ることができる．

特徴三も他の I 類鐸には見られず，あえて類例を探せば吉備・呉妹鐸（突線鈕 2 式迷路派流水文）の A・B 面鈕下端の右方に飾られた多条平行線に系譜を求めることができる．

近畿式銅鐸は大福型・迷路派流水文・横帯分割型などの銅鐸群の特徴を引き継いで成立したと考えられているが（難波，2021），八貫渡鐸には，横帯分割型と迷路派流水文銅鐸の施文要素が変則的に温存されている．突線鈕 4 式以降の近畿式銅鐸にこのような様相を示す例は希少である．

類似した変則様相は天理参考館鐸にも確認される．天理参考館鐸は縦帯の区画突線・軸突線が下辺横帯下の界線と交差している．C 系列ながら左右縦帯の突線は，第一横帯下から始まっており，かつ一側縦帯は斜格子文がなく，無文である（置田，1990）．また一側縦帯は第三横帯交差部以下が無文のようであり，左右縦帯と交差する部分の下辺横帯の鋸歯文も省略されている（図 5-1 左）．

下辺横帯を突き抜ける縦帯の突線は近江・大岩山Ⅱ－六号鐸にも見られるが，左右縦帯の無文化や下辺横帯側面の鋸歯文の省略は扁平鈕式新段階末の名東型の施文方に通ずるものがある．

鈕の施文は菱環文様帯の区画界線が A 面 3 条に対して B 面 1 条の相違のみであるが，B 面左上方の 1 単位 1R 鋸歯文の使用や飾耳基部に縦横に交差しない条線を混用する飾り方には八貫渡鐸と共通性がある．

さらに鈕形状においても八貫渡鐸・天理参考館鐸の上縁は，山田代鐸・下本郷鐸に比べて丸みがあり，そのため鈕上縁の平坦長がわずかながら短いという違いがある．鈕の基部を起点にして同縮尺で重ね合わせると，八貫渡鐸・天理参考館鐸・大久保鐸は上縁形状が一致するのに対して，山田代鐸・下本郷鐸は頂部の外縁左右が若干外方に張り出し，角張った隅丸方形を呈すという違いが見られる．下本郷鐸は左右の飾耳付根部分の張り出しも強く，方形指向が進んでいる（図 6）．

これに連動すると考えられる紐外縁第一文様帯の鋸歯文数は，天理参考館鐸は A 面では 25 ＋ 1/2 単位，B 面では 27 単位で，上縁の鋸歯文基底幅が広く大きい．大久保鐸は A 面 30 単位・B 面 29 ＋ 1/2 単位であるが，山田代鐸は A 面 31 単位，B 面 30 ＋ 1/2 単位を数え，上縁の鋸歯文基底幅が狭く密になっている．下本郷鐸も同様である．八貫渡鐸の鋸歯文は天理参考館鐸に近い．

このように八貫渡鐸・天理参考館鐸は装飾上の，鈕形状には大久保鐸を加えた近似性が指摘できる．一方，身の左右縦帯の交差は，大久保鐸は第一横帯軸突線部から始まっており，山田代鐸も同じである．下本郷鐸では左右縦帯界線は身上縁の突線まで延びている．

この 3 鐸は第一横帯と左右縦帯の交差位置に違いはあるが，鈕の装飾を含めて定型様相を示すのに対して，天理鐸・八貫渡鐸には変則様相を随所にとどめている．こうした様相差は時間差，すなわち製作の新旧を反映しているととらえることが可能である．鈕上縁の形状や施文・左右縦帯と横帯の交差形状を勘案すれば，八貫渡鐸・天理参考館鐸，大久保鐸，山田代鐸，下本郷鐸の順に製作されたと考えられる．

三　八貫渡鐸をめぐる問題

（一）紀伊製作説に関して

山田代型銅鐸は分布傾向から，紀南地域の特徴あるいは紀伊およびその周辺地域での製作ととらえる意見が多い（堅田，1994）・（和歌山県立紀伊風土記の丘資料館，1996）・（萩野谷編，2012）．難波洋三は山田代型を含む C 系列鐸の製作拠点を近畿の中心地域でも南部に，東海地域に多い A・B 系列鐸をそれよりも北にある可能性を示唆している（難波，2007）．

私見では山田代型は C 系列群の中でも独立した鐸群である．Ⅱ類鐸の久田谷鐸・鐘巻鐸・朝来鐸では丸みを帯びた小判形鈕，二重の菱環文様帯，内縁は鋸歯文へと変化する．鐘巻鐸と朝来鐸は鈕の外縁第一文様帯下端に綾杉文隆帯が付加されている．これらの変化要素は内縁を鋸歯文で飾る突線鈕 5 式 B・C 系列に求められるであろう．よって製作拠点も近接地域と考えられるが，鈕の双頭渦紋飾耳は

依然として大きく，鰭下端の飾耳位置が確認できる鐘巻鐸・朝来鐸は，飾耳が第四横帯軸突線の延長部に位置する．下辺横帯下の界線より上位に飾耳が位置するのは突線鈕 5 式鐸ではこの 2 鐸のみで，これも独立した銅鐸群であることを支持する．

私は銅鐸の分布密度に基づき，阿波北部銅鐸群と阿波南部銅鐸群を設定しているが，那賀川・桑野川流域に拡がる阿波南部銅鐸群の扁平鈕式鐸～突線鈕 2 式鐸は吉備・瀬戸内東部・摂津系銅鐸群から構成されている（菅原，2019）．Ⅰ類先行製作と見られる八貫渡鐸には吉備・瀬戸内東部系銅鐸の要素が認められる．天理参考館鐸にも阿波系譜ともいえる施文省略の要素が温存されている．また阿波や播磨・但馬地域の山田代型鐸は分布の偏在性を示していないことから，製作拠点を紀伊やその周辺部に想定する必要はないであろう．

阿波南部銅鐸群は朱供給の代償と見られるが，銅鐸諸相は朱を介した交渉の範囲を反映するものと考えられる．直接的証左として，阿波水銀鉱床群内の採掘・加工遺跡における搬入土器を見ると，若杉山遺跡の再整理結果では，鮎喰川・園瀬川流域の阿波北部銅鐸群保有集団である鮎喰川集落産土器がⅤ－4 期以降，出土総点数の 59％を占め，その他は地場 23％，産地不明 11％，讃岐 6％，畿内系および山陰系 1％となっている（西本編，2017）．深瀬遺跡でも後期後半では鮎喰川集落群の土器が顕著である．中期末から後期初頭にかけて 50 棟を超える竪穴で鉄器生産の鍛冶炉が検出された加茂宮ノ前遺跡は，調査終了後間もないので検討には至らないが，調査中の観察では類同の傾向を示すようである．

さらにこれ以降も野尻遺跡，津乃峰北斜面遺跡，大原遺跡などに鮎喰川集落産土器（東阿波型土器）が拡散している（図 7）．これらの状況から，朱の生産流通に鮎喰川集落群の強い関与がうかがえるが，加茂宮ノ前遺跡では若干ながら角閃石を含む胎土をもつ畿内系土器や近畿地域の黒色粘板岩系剣形石製品が見られることに注意しておきたい．

朱の採掘・加工遺跡は水銀鉱床群の広範囲に拡がっており，かつ概要が判明する遺跡も限定されている．現状での土器様相と銅鐸製作地域とは必ずしも連動するとは思わないが，土器から見た地域間交流においても紀伊地域との関係は希薄である．このことも山田代型銅鐸の製作拠点を推測するうえで示唆的である．

（二）阿波南部銅鐸群の様相変化と継続性

扁平鈕式から突線鈕 2 式鐸までの阿波南部銅鐸群は，銅鐸様相・使用形態・埋納姿勢が阿波北部銅鐸群と異なっており，製作地域の祭祀形態が反映されている可能性を別稿で指摘した（菅原，2019）．

阿波北部銅鐸群では扁平鈕式最終段階において，園瀬川流域から鮎喰川流域への分布域の移動，多数埋納から単独埋納への変化，丘陵埋納から平地（集落）埋納への移行が見られる（菅原，2018）．南部銅鐸群でも突線鈕 2 式鐸を境に桑野川流域から那賀川流域への分布域の移動と単独埋納への変化が認められる．該当銅鐸は突線鈕 2 式 C 系列の畑田鐸・突線鈕式と推定される小山田鐸[1]と八貫渡鐸である（図 7）．

八貫渡鐸出土地周辺は以東の乱流によるデルタ地形に対して，安定した平地となっている．南の丘陵部には城山遺跡・上大野遺跡・西方遺跡などの実態は不明だが中期末から後期初頭の高地性集落が点在する．また最近の調査から，那賀川に沿った自然堤防上に朱生産に関係する集落群の展開が明らかになりつつある．新たな銅鐸分布域の形成は，水銀鉱床群内の生産拠点の移動・拡大と連動するものと思われる．

埋納姿勢では畑田鐸はなお水平埋納を維持しているが，畑田鐸は内面突帯がない唯一の例であり，内面突帯に使用痕のある桑野川流域鐸群からの変化，すなわち聞く機能から見る機能への移行を示す好例といえる．また八貫渡鐸出土地を原位置と見ると，本分布域では眺望のきかない丘陵埋納から平地埋納への移行という阿波北部銅鐸群との共通性も現れている．こうした銅鐸の使用方・埋納場所の変化は鮎喰川集落群の影響が予想されるところであるが，埋納スタイルや銅鐸相の違いはなお継続していると見られる．

紀伊では突線鈕 4・5 式鐸は紀北地域の砂山鐸（4 式 C）のほか，日高川流域の鈕内縁を鋸歯文で飾る向山 1 号鐸（3 Ⅱ b 式 C）・半円重弧文で飾る 2 号鐸（3 Ⅰ b 式 C）・鐘巻鐸（5 Ⅰ式 C），南部川流域の大久保鐸・雨請山鐸（5 Ⅰ式 B），会津川流域の山田代鐸・後口谷鐸（5 Ⅱ式 C），富田川流域の朝来鐸（5 Ⅱ式 C）というように山田代型鐸と非ブリッジ鐸，内縁鋸歯文と半円重弧文，袈裟襷文系列が混在する様相が見られる．

このことが紀南地域の突線鈕式鐸多出の要因と思われるが，このうち大久保鐸と雨請山鐸は谷を隔てて埋納されている．雨請山鐸は規格・形状が矢野鐸とよく似ており，進藤　武は内縁を 5 区画した半円重弧文の配置や第一・四横帯の横軸突線が鰭まで延びない点などから，同一工人作と見たが（進藤，2007），保有銅鐸の融和性が見て取れる．

阿波では突線鈕式銅鐸の出土数が少なく，保有実態を理解するうえで難はあるが，阿波北部銅鐸群以北に矢野鐸（5 Ⅰ式 C）・鳴門市檜鐸（4 式 A）[2]の非ブリッジ鐸が分布する．朱と結びつく可能性が高い矢野鐸と八貫渡鐸が対峙するよ

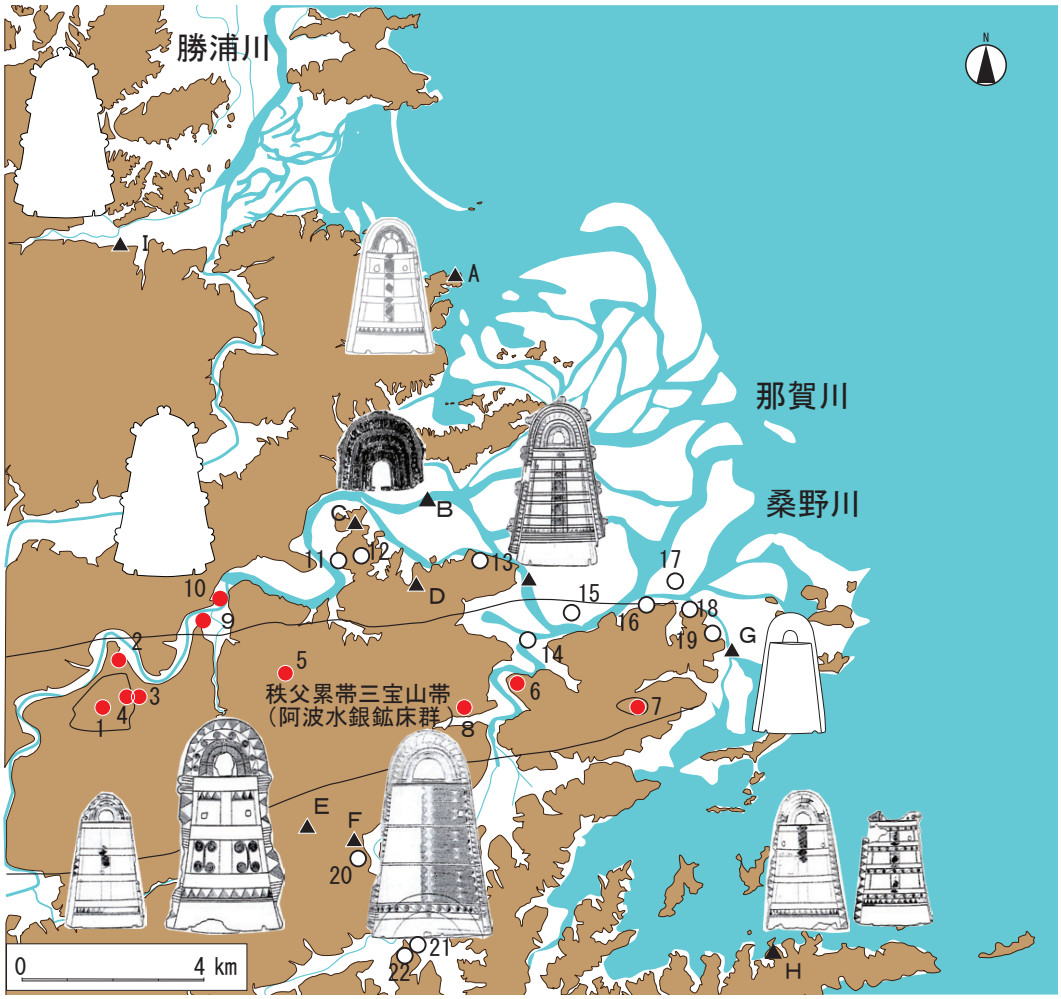


図 7　銅鐸と弥生遺跡群（▲銅鐸出土地　●朱採取・加工遺跡　○高地性集落等）
A 勢合鐸　B 八貫渡鐸　C 小山田鐸　D 畑田鐸　E 長者ヶ原鐸　F 田村谷鐸　G 才見鐸
H 曲り鐸　I 多家良鐸（白抜きは型式不明鐸）

1 若杉山遺跡　2 中野遺跡　3 寒谷遺跡　4 丹波坑口遺跡　5 野尻遺跡　6 奥ノ谷遺跡　7 津乃峰山北斜面遺跡
8 堂谷遺跡　9 加茂宮ノ前遺跡　10 深瀬遺跡　11 城山遺跡　12 上大野遺跡　13 西方遺跡　14 大原遺跡
15 宮ノ本遺跡　16 池田山遺跡　17 牛岐遺跡　18 正福寺山遺跡　19 下水田遺跡　20 白石遺跡　21 樫房遺跡
22 室ノ久保遺跡

うな状況は，両地域が「朱」をキーワードに強く結びついてはいるが，最新式銅鐸の選択や入手方が阿波北部と南部で依然として異なっていたことを推測させる．八貫渡鐸にかかる問題はおおよそ以上である．

四　銅鐸余滴

最後に本論からは外れるが，八貫渡鐸周辺の大形銅鐸について触れておきたい．徳島県出土の伝承がある銅鐸の中で突線鈕式銅鐸と考えられるのは，小山田鐸のほかに現物不明の徳島市八多町の多家良鐸がある．1913 年，民家の石垣改修時に出土した全高四尺八寸の袈裟襷文銅鐸で，鈕を東に横臥した埋納姿勢をとり，鐸身内部には何もなかったとされる．出土後売却されたため，報文を書いた田所市太も実見していない．近接地では別の鐸片（推定三尺）も出土したという（田所，1917）．大きさの信憑性は弱いと思われるが，大形の銅鐸であったことを暗示する．出土場所は阿波北部銅鐸群と南部銅鐸群の分布域の中間に当たるが，周辺には南部銅鐸群に包括される勢合鐸もあり，本銅鐸群に近い位置関係となる（図 7- №. I）．

多家良鐸に遺存の可能性があるとすれば，全高 100cm 前後以上の近畿式銅鐸が想定される．来歴不明瞭あるいは出土地不明の大形銅鐸は，フリーア美術館鐸（4 式　伝長

野県出土），天理参考館鐸（山田代型Ⅰ類），名古屋市博物館鐸（4式　推定近江出土），アルカンシエール美術財団鐸（5Ⅰ式　伝紀伊・大久保出土），九州国立博物館鐸（5Ⅰ式　伝尾張徳川宗家戸山屋敷旧蔵），辰馬考古資料館449号鐸（5Ⅰ式　伝紀伊・日高郡出土），辰馬考古資料館450号鐸（5Ⅱ式　伝益山寺境内出土）等を挙げることができる．このうち辰馬考古資料館449号鐸とフリーア美術館鐸，天理参考館鐸は鈕内縁を半円重弧文で飾っている．

四国の突線鈕式鐸は系列の違いにかかわらず，鈕内縁を半円重弧文で飾る鐸群で占められている点からすれば（菅原，2008），多家良鐸も鋸歯文で飾る銅鐸ではない蓋然性が高い．この中で天理参考館鐸は東京の古物商からの購入時（1955年カ）において，阿波国出身の貴族院議長（旧徳島藩主蜂須賀茂韶）蔵という所伝があったという（置田，1990）．蜂須賀家蔵品は14代藩主茂韶の東京移転（1872年）以降，売立られて徐々に散逸している．檜鐸はその1つであった．

天理参考館鐸に係る所伝は梅原末治により否定されているが，所伝が作られる要因としては，蜂須賀家が銅鐸を所蔵していたという情報に基づいた可能性や，阿波出土鐸に箔付けとして蜂須賀家蔵を付した可能性も考えられる．大名家所蔵の銅鐸は他にもあり，ことさら蜂須賀家蔵を付す理由としては，「阿波出土の銅鐸故」という可能性は否定できないと思われる．以上の点から天理参考館鐸は多家良鐸の候補の一鐸になりうるであろう．

山田代型銅鐸は紀南・播但地域出土例のように，特定方面地域に継続的に供給された可能性がある．述べたような推測が成り立つとすれば，阿波北部・南部銅鐸群の対峙構図を補強するものとなり，Ⅰ類先行製作2鐸の阿波南部地域，Ⅰ類後続製作2鐸とⅡ類2鐸の紀南地域，Ⅰ類後続製作1鐸・Ⅱ類1鐸の播但地域への供給というような構図も描かれよう．

現状では天理参考館鐸の出土地をうかがう手掛かりはないが，鐸に固着した銹土・砂粒の分析学的手法による埋納地に関する検討[3]などが推進されることを願って擱筆する．

付記

1992年12月26日，徳島市矢野遺跡で検出された矢野銅鐸について佐原　真さんに指導いただいた．埋納銅鐸を前にして，「この銅鐸は和歌山から運ばれてきたんだ」と言われた．雨請山銅鐸が念頭にあったと思われるが，佐原さんは矢野銅鐸が紀伊地域で製作されたと考えておられたようだ．これも論旨とは関係しないが，一場の思い出として書きとどめたい．

謝辞

成稿にあたり八貫渡銅鐸の採拓には徳島県立博物館の許可を得，形状図の製図には岡本和彦氏の協力を得た．田辺市立図書館・天理大学附属天理参考館及び植地岳彦・大野左千夫・前田敬彦の各氏には種々の便宜を図って頂いた．感謝いたします．

註

1）小山田鐸は1938年，山林開墾中に出土したとされる．発見者の記憶では全高50cm前後で鈕がやや厚手で，双耳があったとされる（阿部，2001）．双耳のある中形銅鐸は，外縁付鈕1・2式鐸や扁平鈕式銅鐸の複数鐸群にあるが，那賀川流域では扁平鈕式銅鐸は確認されておらず，2km四方に畑田鐸・八貫渡鐸が位置することから，突線鈕式鐸の可能性が高いと考えられる．

2）菅原（2008）でB系列としたが，公益財団法人東洋文庫「梅原考古資料　銅鐸画像データベース」整理番号NY-1199 4087によりA系列に訂正する．

3）徳島県三好市西祖谷山村の榎鐸は，同地に所在する鉾神社の神宝として安置されているが，徳島大学石田啓祐教授（当時）によると，鐸身内部に固着した砂礫には石英の鉱物粒や金雲母細片，円磨されていない角礫状の結晶片岩粒が含まれており，三波川帯の結晶片岩類の風化によって生成される土壌と同一と観察されており，神社周辺に埋納されていた蓋然性の高いことが指摘できる（菅原・藤川・植地，2011）．

引用文献

阿部里司．2001．新知見の銅鐸について－徳島県阿南市上大野町小山田出土銅鐸－．徳島の考古学と地方文化，p. 119−120．小林勝美先生還暦記念論集刊行会，徳島．

置田雅昭．1990．兵庫県佐用郡三日月町下本郷発見の銅鐸について．兵庫県の歴史，26:1−13．

萩野谷正宏．2012．青銅器とまつり．紀伊弥生文化の至宝，p. 12−13，和歌山県立紀伊風土記の丘，和歌山．

堅田　直．1994．山田代銅鐸出土地．田辺市史 第4巻

史料編 1, p. 357−364, 田辺市史編さん委員会, 和歌山.
国立歴史民俗博物館．2009．弥生青銅器コレクション．253p．千葉.
難波洋三．2007．近畿式銅鐸と三遠式銅鐸－その成立と展開．難波分類に基づく銅鐸地名表の作成　平成 15 年度～ 18 年度科学研究費補助金　基礎研究（C）研究成果報告書．p. 1−39．
難波洋三．2021．突線鈕 1・2 式銅鐸とその相互関係．大岩山銅鐸の形成－近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立と終焉．p. 31−41．野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)，滋賀.
西本和哉編．2017．赤色顔料生産遺跡及び関連遺跡の調査　採掘遺跡　土器編．144p．徳島県教育委員会, 徳島.
進藤　武．2007．和歌山の銅鐸－扁平鈕式銅鐸と突線鈕式銅鐸を中心に－．紀伊考古学研究会　第 10 回記念大会 和歌山・弥生時代と銅鐸，p. 27−59，紀伊考古学研究会，和歌山.
菅原康夫．2008．祖谷の銅鐸．古代学研究，180:84-92.
菅原康夫．2018．阿波の亀山型銅鐸とその周辺．実証の考古学―松藤和人先生退職記念論文集－，p. 159−177，同志社大学考古学シリーズ刊行会，京都.
菅原康夫．2019．阿波・勢合銅鐸とその周辺．古墳と国家形成期の諸問題　白石太一郎先生傘寿記念論文集，p. 304−308，山川出版社，東京.
菅原康夫・藤川智之・植地岳彦．2011．三好市西祖谷山村榎　鉾神社所蔵の銅鐸－榎銅鐸，真朱，9:1−22.
田所市太．1917．阿波國の銅鐸發見地に就いて．考古学雑誌，7(11):714−715.
田辺市史編さん委員会．1994．田辺市史第 4 巻　史料編 1．p362．和歌山.
玉置繁雄．1902a．阿波の銅鐸及び古墳．東京人類学雑誌，192:249−250.
玉置繁雄．1902b．阿波の銅鐸．東京人類学雑誌，194:338−339.
天理大学附属天理参考館．1971．銅鐸と銅利器　遺跡案内シリーズ No. 9．天理大学出版部，奈良.
東京国立博物館．2005．東京国立博物館図録目録　弥生遺物篇（金属器）増補改訂．229p. 中央公論美術出版，東京.
梅原末治．1927．銅鐸の研究 資料篇・図録．388p. 大岡山書店，東京.
和歌山県立紀伊風土記の丘．1999．特別展　きのくにの銅鐸．27p. 和歌山県立紀伊風土記の丘，和歌山.

挿図出典

図 1，図 4　徳島県立博物館提供
図 3 （図 1，図 2）を基に作図.
図 5　天理大学附属天理参考館（1971）．田辺市史編さん委員会（1994）
図 6　天理大学附属参考館（1971），置田（1990），田辺市史編さん委員会（1994），国立歴史民俗博物館（2009）・和歌山県立紀伊風土記の丘（2018）を基に作図.
図 7　菅原（2019）の図 4 に加筆.